

## 発達に違いのある子どもたち 幼児期のことばの育ち(中編)

広報うと7月号の(前編)では、次の3つのことをお伝えしました。今回は、話しことばの基礎となる構音器官(口の音を作る場所)の発達に影響を及ぼしやすい、乳児期、幼児期前半の食べる機能の発達についてお話しします。

### 【前編の内容】

- ① 幼児期の子どもの話しことばの発達は個人差があり「わかることば、わかることば」が重要であること。
- ② ことばが出だしても、日本語の五十音がいっぺんに言えるようになるのではなく、音の作り方が簡単なものから複雑なものへと徐々に増えていき、その進み具合も人それぞれであること。
- ③ 子どもが十分に話せないながらも「伝えたい」という気持ちで、周囲の大人がモデルになつて育んでいくことが、子どものコミュニケーション能力を発達させる、大切な条件となること。

### 食べる機能の発達と話しことばの発達

生まれてからことばを話し始めるまでの大切な時期は、おっぱいから離乳初期食、中期食、後期食、幼児食、大人と同じ食事へと進む時期とピッタリと重なります。

口の中は、ことばのひとつひとつの音を作る構音器官でもあり、食事を取り込みすりつぶし、唾液と混ぜて飲み込みやすい形にし、食道へと送り込む処理をする場所でもあります。食べ方が上達するとともに、口腔内でだんだんと複雑な音を作れるようになっていきます。

### 離乳食の大切さ

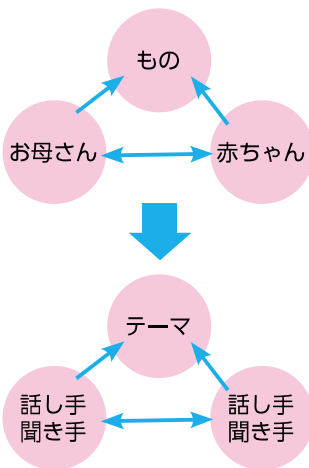
おっぱいや哺乳瓶から哺乳する動作は、生命維持のために、生まれつき仕組まれた哺乳反射によるものなので、赤ちゃんは考えなくても乳首を探し、口を含み、吸うという一連の動作ができます。しかし、いつまでも哺乳反射が残っていると、自分の意思で食べることを妨げてしまいます。

反射による生命維持の方法から、自分の意思で食べる生命維持の方法へと移行する、それが「離乳食」です。離乳食を始める時期は、哺乳反射が弱くなる5ヵ月頃からですが、そ

の頃スプーンで離乳食をあげても最初はベーツと出してしまいます。それはまだ乳首を吸う時の舌の動きが残っているからであり、スプーンという食器に少しずつ慣れてくると、パクンと上下の唇でスプーンを捉え、食べ物を取り込むことができるようになります。上唇と下唇を自分の意思で開けたり閉じたりできるようになる離乳初期の時期に、同じ動作で言える「マ、パ、バ、ブ」などの喃語を作れるようになります。

離乳中期になると、それまで前後に動いていた舌は、しっかりと閉じられるようになった口の中で上下に動き出します。そして、少し形のある食べ物を舌と上顎で潰すことができようになるようになります。それと同じ動作で言えるのは「ダダダ、ナナナ、トトト」などで、この頃になると喃語も反復して、自分の声で遊ぶような様子が見られます。食べ物を舌でまとめてゴックンするのが上手になると、「カ、ガ」などの音も作れるようになってきます。

しかし、赤ちゃんが出せる音を使って話せるようになっていくには、目の前でちゃんとその声を受け



取り、優しい表情、優しい声で返してくれる相手が必要です。離乳食をただあげるのではなく、目を合わせ、赤ちゃんときやり取りをしながら食事を楽しむ時間を作る。それがこれから先のコミュニケーションの基礎となります。離乳食の時期は永遠に続くわけではありません。その限られた時期に、しっかりとことばを育むことができる環境を準備してあげてください。

### 文書寄贈

NPO法人ころ・コミュニケーションの発達支援「まいすてっぷ」

### 参考文献

『ママが知らなかったおっぱいと離乳食の常識』小学館/監修 中川信子  
『生まれたときからことばを育てる暮らし方』保健同人社/中川信子 著



### 復興支援講演会を開催します!

主催はNPO法人ころ・コミュニケーションの発達支援「まいすてっぷ」講演者は中川信子さんです。詳しくはP20をご覧ください。